

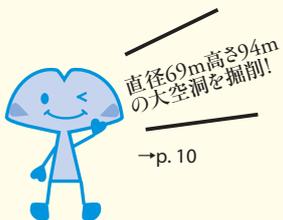
# 学内六報

2025.7.25

no.1596



ハイパーカミオカンデ空洞掘削完了記念見学会 (6月28日)



加賀藩邸の歴史を継ぐ本郷のオアシス  
三四郎池について  
学生&教員有志と考える

本郷のシンボルなのにあまり構成員から愛されていない？

# 三四郎池育徳園心字池について 学生&教員有志と考える

●三四郎池は正しくは心字池。一帯は加賀藩前田家の屋敷だった頃の名称で育徳園といえます



●現在は設置されていません

4月、広報室に1通のメールが左の看板の画像付きで届きました。送信者は農学部4年生。「生態系構築」という表現を錦鯉に用いるのは適切なかと問題を提起し、三四郎池についてあらためて考える企画をと訴える内容でした。そこで広報室では、生き物を愛する学生たち、三四郎池周辺を調査してきた生態学の研究者、「育徳園のあり方検討WG」の座長を務めた都市工学の研究者、学生たちが参加する教育プログラムの運営教員にもお声がけして座談会を企画。三四郎池について自由に話し合ってもらいました(6月25日)。錦鯉文化に詳しい研究者の言葉もあわせて紹介します。150周年を前に三四郎池について考えてみませんか？



2015年度から「育徳園のあり方検討WG」主査を務める。専門は都市工学、緑地環境計画。

総括プロジェクト  
特任教授  
横張 真



森林動物学研究室主宰。専門は昆虫を中心とした無脊椎動物に関する進化生態学、群集生態学。

農学生命科学研究科  
教授  
池田 紘士



One Earth Guardians 育成機構アドミニストレーター、東京大学認定URA。

農学生命科学研究科  
准教授  
中西 もも

“中西 順に自己紹介をしていきましょう。

私はOne Earth Guardians育成プログラム(OEGs)<sup>※1</sup>を担当しています。100年後も人と他の生物が共存するために行動を起こす科学者を育成しようというプログラムです。農学は人が自然の恵みを活用する必要から始まり、人が他の生物や環境とどう関係するのかを扱う学問です。今回の話もそうしたテーマに関するものだと思います。

## 錦鯉の「生態系構築」に疑問が

長尾 農学部獣医学専修の4年生です。高校時代、構内に来た際にこの看板を見てオヤツと思い、入学後も三四郎池に来るたび違和感を覚えていました。錦鯉に「生態系構築」という言葉を使うのは外来種を広めるのを是とすることにならないか、それが農学部を持つ大学にあってよいのか、という問題意識です。モヤモヤしていて、OEGsの活動のなかで中西先生に相談した際に、本部広報に連絡するよう助言され、メールを送ったという次第でした。

水野 私は工学部都市工学科です。UTokyo GXSN<sup>※2</sup>の一員ですが、生物に詳しいわけではなく、OEGs同期の長尾さんに詳しくない人の例として誘われたと思います。茶道部に所属し、五月祭の際に三四

郎池の畔で茶会を開催しています。

田中 所属は農学部保全生態学研究室です。長尾くんはOEGsと生物研究会<sup>※3</sup>の同期です。自分も看板が気になっていましたが、何かしようとは考えていませんでした。

菅原 所属は農学部森林動物学研究室です。爬虫類が好きで、三四郎池を調査地の一つとして、カメなどの調査を進めています。三四郎池は構内の名所というより調査場所の一つだと思っています。

池田 農学部森林動物学研究室の教授を務めています。生き物マニアというわけでは

なく、生き物マニアが多い研究室を運営しています。今日は前にOEGsで昆虫のワークショップに携った縁で参加しています。

## 自然と歴史と保健休養の価値

横張 私は工学系研究科都市工学専攻で教育研究生活を送り、特に都市の緑地環境を考えてきました。2014年、育徳園の将来計画を考えるWGが発足し、私が主査を務めました。農、工、理、文、埋文の教員にお声がけし、約1年の議論を経て、2016年に報告書<sup>※4</sup>を出しました。そのなかでは育徳園の価値を3つに整理しました。自然環境、歴史の重層性、保健休養です。貴重な生き物があるのでその保全が重要だ、江戸時代から残る歴史遺産が重要だ、特定の生物種でなく人と自然の関係性が重要だ……。様々な主張が出ましたが、皆で一致したのは、育徳園を覆い尽くすように繁茂していたシュロの扱いでした。どの立場から見てもまずいと一致し、その多くを取り除きました。しかし予算的な難しさもあり、報告書の提言で具体的に実施できた施策は限られ、以降は日常的な管理にとどまったように思います。ちなみに、この看板は知りませんでした。2016年にはなかったものです。

※1 <https://www.one-earth-g.a.u.tokyo.ac.jp/> ※2 <https://www.utokyo-gxsn.org/> ※3 <https://utseiken.wixsite.com/site>

**中西** 報告書が時間スケールを積層して整理されているのが印象的でした。大名屋敷の庭池、防災、教育・研究……と機能が変化しながらレイヤーが重なった上に現在の三四郎池があり、池にどう向き合うかはその時代ごとの人々に開かれているという整理に腑が落ちる思いがしました。

**横張** 生態学の分野では最近、Novel ecosystemという考え方が提唱されつつあります。人間の影響で改変された自然も一つの生態系として認めようというもので、都市の生態系に関してよく言及されます。

たとえば、明治期の東京の年平均気温は現在より約4度も低く、現在の仙台に相当します。一方、現在の東京の年平均気温は大分と同程度。130年で仙台から大分まで移ったようなものです。在来種の保全というと、人の影響が小さい時代にいた生物をリファレンスとするのが一般的ですが、その前提には、気候や地形など、地となる自然環境に変化がなく、人為影響だけが変化していることがあります。大分の生態系を考える際に、仙台にいる生物をリファレンスにすることが概念的に正しいのか。私は少々疑問です。

**中西** 確かに、外来種も変わりゆく生態系を構築する一員と捉えることもできるかもしれませんね。では、最近の三四郎池の生物相について教えてください。

### 三四郎池の水は……「臭い」

**菅原** 胴長（胴付長靴）を着て池に入った際の印象は「臭い」でした。周辺の陸域の生態系は豊かです。爬虫類だとニホンカナヘビやヒガシニホントカゲやアオダイショウやシマヘビがいました。絶滅危惧Ⅰ・Ⅱ類が見つかるのは文京区だと小石川かここくらいでしょう。一方、水域の生態系は貧

相です。見かけるのはコイ、アカミミガメ、クサガメ、ブラックバス、ブルーギル、アメリカザリガニなど。自分としてはバスやギルは駆除したい気持ちです。チョウやトンボはいますが、ゲンゴロウやガムシといった水生昆虫は全然いません。研究室の虫好きの先輩は「終わってる」と愚痴っていました。

**田中** 私は環境三四郎<sup>※4</sup>というサークルで駒場の二二郎池を拠点に生物調査やイベントを行っています。二二郎池は、近所の子や家族連れが生き物を探ったり犬を散歩させたりしていて、自然環境と保健休養の両方で使われています。自分は在来種主体の生態系を持つ池であってほしいです。弥生の圃場ではアマガエルが鳴き、ハイイロゲンゴロウもいます。三四郎池も二二郎池も管理次第でそうした生き物が棲む可能性があると思います。ただ、日本では外来種も結構受け入れられていて、幼少時の思い出にアメリカザリガニ釣りを挙げる人もいます。どう合意を形成していけばいいのかはわかりません。

### 在来種の方が環境教育に○？

**池田** 環境教育の場とするなら、在来種が多いほうが活用しやすいでしょう。本来いなかった地域に虫を放すなど、よかれと思ってやったことが後に問題になることがあります。三四郎池の錦鯉もそうだったのかもしれませんが。環境教育がうまく進めば生物学はもっと発展します。かわいい動物やきれいな植物を守りたいと思うのは自然ですが、特定の種を守ると他の種が減るかもしれません。生物間の関係を踏まえた考え方を幼少時から育めればよいのですが。

**中西** 教育・研究の場であることに加え、アクセスしやすいという価値もあるでしょ



本企画の提案者。OEGs 7期生。野外生物系の学生サークル・生物研究会(略称、生研)に所属。

農学部4年  
長尾佳介さん



OEGs 7期生。4つの学生環境団体によって2021年に組織されたU T o k y o GXSNの一員。

工学部4年  
水野那奈子さん



OEGs 7期生。1993年発足の学生サークル・環境三四郎のメンバー。保全生態学研究室に所属。

農学部4年  
田中宏樹さん



森林動物学研究室で「観光客による餌付けが外来カメに与える影響」を研究中。爬虫類が好き。

農学部4年  
菅原瑞生さん

※4 <https://www.u-tokyo.ac.jp/content/400042002.pdf> ※5 <https://www.sanshiro.ne.jp/content/>

う。観光客や近隣の人も来やすいのはよいことですが、それで起きる問題もあります。**水野** この前、観光客が店で買ったパンを鯉にあげていたと聞き、衝撃でした。臭くて汚い三四郎池ですが、歴史に価値を認める人が多いからか、ここでいう茶会は大人気です。個人的には、臭いや蚊が消えたら歓迎ですが、在来か外来かというのは割とどちらでもいいので、熱意がある人たちの思いを尊重したいです。歴史に価値を感じている人の意見も聞くべきですが、現状三四郎池は大事にされているとは言い難いですし、何かしら改善は必要でしょう。

### 昔はスケートも遊泳もできた

**中西** もとは大屋敷だとか夏目漱石の小説が由来とか、なんとなくしか知らなくてすよね。報告書を読んで、大坂夏の陣の褒美だったとか、昔はスケートや遊泳ができたとも知って驚きました。もっと人との関係が身近だった頃の姿を知りたくなります。**長尾** 外来種を駆逐することが自然環境的に望ましくても、保健養育的にはよくないかもしれません。在来種は小さいことが多

く、景観的には見栄えしません。掻い掘りをして、ザリガニが泥に潜って駆除し切れないと後で大量繁殖するかもしれないし、外来種がいなくなると天敵が消えたボウフラが大量発生しかねません。極端な施策にはリスクが伴います。でも、誰もが一致できることもあります。臭い池がよいと思う人はいませんよね。微風でもいいから池に風を吹かせたいです。睡蓮などの水生植物によって環境と景観の改善が両立できないか。学内の様々な専門家の知を集めれば何かできることがあると思うんです。

**横張** 重要な問題として、大学には外部空間の整備にまわす資金が十分にありません。研究なら外部資金を得る道もあり、建築物なら特別な予算を取ることできますが、キャンパスの外部空間の整備の場合、大学全体にデフォルトで支給される予算から捻出するしか方法がありません。一方で、長尾さんのように声を上げる学生がいることは、大学の大きなポテンシャルです。

**中西** 学生と話すなかで掻い掘りのアイデアが出ました。掻い掘りには外来種駆除、水質改善のほか、多くの人が参加すること

の効果もあるようです。池の生き物を知ることができれば環境教育にも有効ですね。

**横張** 重要なのは中心になって動く人がいるかどうか。無責任なことは言えませんが、学生が本気で提案すれば大学も動かざるを得ないはず。ただ、いろいろな考えの人がいるので、調整は大変ですが。

**中西** 今後の三四郎池に期待することは？  
**池田** 陸域の多様な生物相は、ある程度粗い管理をしているからかもしれません。日本庭園のようにしっかり管理すると生物相は貧相になるでしょう。なので、個人的には現行のようにある程度ゆるく管理する状態がいいのではと思っています。

**田中** 三四郎池に関心がある人たちが話せる場を作りたいんです。私の家から近い六義園では錦鯉やブラックバスを見かけます。陸域にはカナヘビもいて、三四郎池と似ています。でも学生が関わりやすいのは三四郎池。そこが大きな違いだと思います。

### 三四郎池だけ臭いのはなぜ？

**菅原** 小石川や六義園の池は似ているけど臭くありません。底が泥か落ち葉かで変わ

## 東大人なら知っておきたい三四郎池トピックス

### 錦鯉が歴史を語る YouTube 動画「三四郎池の生き物たちとの出会い」



2024年8月、YouTubeの東京大学公式チャンネルにオリジナル動画が公開されました。三四郎池で暮らす錦

鯉が、池の来し方について英語でひとりごつという意欲作。演者は黄色っぽい錦鯉ですが、人間の言葉が話せないため、キャンパスの歴史に詳しい人文社会学系研究科文化資源学専攻の松田陽先生がナレーションを務めています。

### 三四郎池畔にいた爬虫類



菅原さんが捕まえて大事に育てている爬虫類の皆さん(菅原さん提供)

### 浚渫が過去に数回行われている



「育徳園のあり方検討WG報告書」p.87より

本誌352号のp. 6には、1977年1月～3月の浚渫工事に協力を呼びかける記事が載っています。このときはカラス貝や日本刀や弾丸も出てきたとか。施設部の記録によると、浚渫が行われたのは1994年が最後。三四郎池がお色直しする次の機会は？

### 教育勅語の避難場所候補だった？

『文書館ニュース』61号p. 5によると、空襲時の教育勅語の扱いに関する1943年の伺書に「最悪ノ場合ニ於ケル奉護場所」として第一工学部水槽下あるいは池畔とメモ書きがあるそう。池は大学の宝を守る場でもあったのかも。

### 「石」と読める敷石も 昔は「アヒル王国」だった



池の畔では「石」と刻印されたような敷石も確認できます。何かに由来するものなのか、ただそう見えるだけなのか？

1951年に植物学の大賀一郎博士が検見川で発見した太古のハスの株が、1953年に三四郎池に植えられました。その前年の1952年には、学内の空気を和らげようとの矢内原忠雄総長の提案と、ハスを食うザリガニ対策のために、アヒルが放たれました。一時は約30羽もの「アヒル王国」となり、人気を得ましたが、矢内原総長が退任した後は様々な要因が重なって数が減ってしまい……と1962年8月22日付毎日新聞が報じています。

### ※ 三四郎池についての意見を募集

「何か行動を起こすために構成員の皆さんの意見を広く聞きたいと考え、意見募集フォームを用意しました。QRコードからアクセスしてご意見をお寄せください。ともに考えてみませんか！」(長尾さん)



のでしょうか。私にはわからないので、水質改善にクリティカルなやり方が何なのかを調査してほしいと思います。

**水野** このキャンパスの広さに対してこのサイズの緑があるのはすごいことだし、鬱蒼としていて面白い空間だと思います。確かに、まずは水質調査が必要です。

**長尾** 今回は3人の先生にご参加いただく場を作りましたが、もう少しがんばればもっと多くの人が三四郎池に興味を持ってくれるようなアクションができるのではないかと思います。自分はあと3年は大学にいる予定なので、仲間を募って次の行動につなげたいと思っています\*。

**横張** 教育研究の場である大学の主役は学生。学生がキャンパスについて提案したいというなら、大学は何かしら応えないといけないでしょう。一方で、提案が形になるにはどうしても時間がかかることも理解してほしい。後輩たちにも、皆さんの思いを伝えてほしいです。

**中西** 将来、三四郎池がこんなに愛されているのは実は今日の座談会があったからかも、などと言われたら最高ですね。

## 濱尾新のヒマラヤスギ



池畔の巨大な濱尾新像の後ろには一本のヒマラヤスギがあります。根元にひっそりと置かれた碑にはこう記されています。「明治四十年の春故濱尾總長閣下が私にヒマラヤ杉の挿木を命ぜられました／そこで私は三百餘本を挿しましたがたゞ一本を残して他は皆根を下ろしませんでした／その一本が即ち此の樹です／大正十二年九月一日の大震災の時にも焼けず元氣よく成長して恰も大學の前途を祝福するやうです／ことし昭和三年九月許しを得此の碑を樹の側に建て、由緒を記すことゝなりました／四十年來の大學の老僕／松本百蔵」。ヒマラヤスギはもとは外来の針葉樹ですが、三四郎池の畔に根付いています。

～錦鯉の研究者に聞きました～

## “天然の池なのか 人工の庭池なのか、それが一番の問題です”

生物学的には悪役にされがちな錦鯉。実は海外でも人気の日本発の観賞魚です。錦鯉を愛する民俗学者に歴史を解説してもらいました。



2023年世界錦鯉サミットでは「泳ぐ宝石『錦鯉』」の題で基調講演。全日本錦鯉振興会名誉顧問も務める。

東洋文化研究所教授  
菅豊

池には、自然の池、人工池、当初は人工だが放置されて自然化しつつある、あるいは自然化した池の3種類があります。三四郎池は江戸時代に加賀藩邸の庭池として人工的に整備されていたはずですが、現在は3番目の状態でしょう。人工の池では景観を彩る美しい錦鯉も、自然に近い状態の池では悪役にされがちです。ただ、錦鯉だけを外来種として否定するのはお門違い。それをいうならば野生鯉の多くが外来種です。

## 環境教育に重宝された時代も…

かつて、錦鯉が環境教育に使われた時代があります。稚魚を放流して関心を持ってもらい、環境保護の機運を高めようという運動でした。別の魚だと鮭の稚魚を都市河川に放流した運動が有名です。しかし、生態学の進展に伴い、もともとそこにいなかった魚を放つような運動は下火になりました。鯉が泥を攪拌すると光が通らず底部の水草が育たないという研究も出てきて、鯉が元々いない生態系に悪影響を及ぼすという認識も広がりました。科学の進展で生き物の社会的評価が変わった一例といえます。

錦鯉の歴史をたどると、江戸時代末期には存在していたようです。当時はまだ錦鯉の名はなく、新潟の山奥でたまたま発生したきれいな鯉を一部の人が大事に育てていたのでしょう。現在の長岡市や小千谷市の辺りにあった二十村郷が発祥とされます。大名屋敷に錦鯉がいたとは考えにくく、加賀藩邸時代の育徳園心字池にいた可能性もまずありません。

明治になって「紅白」という品種が確立され、伝統的な知識と西洋の遺伝学的知識が融合してできたのが、白地の上に黒と赤が載る「大正三色」。1914年の東京大正博覧会に錦鯉\*が出品されて銀杯を受けます。それを皇太子（後の昭和天皇）が気に入り、産地の人々が宮中に献上したことが宣伝となって日本各

地に広がりました。米国大統領に寄贈された錦鯉がホワイトハウスで泳いでいた記録もあります。新潟の山奥のきれいな魚が日本の文化となり、海外に進出したのです。

## 錦鯉ブームが田中角栄で増幅

高度経済成長で庭付き一戸建てが増え、錦鯉愛好家が増えました。ブームの立役者は新潟出身の田中角栄です。目白の御殿で錦鯉に餌をやる写真が「首班指名の朝」の題で新聞に載ったのが1972年。錦鯉品評会の書籍の題字に「国魚」と揮毫したのも彼でした。後には金権政治が取り沙汰され、錦鯉を富裕層の趣味とする印象が強まることにもなりましたが……。その後、日本のファンが高齢化し愛好者は減りましたが、海外での人気が高まりました。オランダのKoiショーが最大で毎年数万人が集まります。現在、日本産錦鯉の8割は輸出。レディ・ガガ、ブラッド・ピットなど海外著名人の愛好家も数多います。体型、模様、色などが評価されて世界王者に輝いた個体だと2億円の値がつくこともあります。

新潟では錦鯉を「うちうお」と呼びます。本来家で飼うべき魚なわけです。三四郎池が庭池なら、錦鯉がいてもおかしくありません。ただ、愛好家としては適切に管理されてない池ではかわいそうだと思います。三四郎池を適切に管理できないなら飼うべきではないでしょう。水草がある環境なら勝手に殖える可能性はありますが、放置しても美しい錦鯉には育ちません。錦鯉は生物学的動物ではなく文化的動物なのです。いずれにせよ、現状はベストではないでしょう。今後、三四郎池をスタート時点のような人工の庭池として管理するのか、「自然らしい池」として人為的に管理する——語義矛盾がありますが——のか、それによって錦鯉の存在の可否が決められるのでしょうか。ただ、人間が放した錦鯉を駆除するような身勝手は避けたいものです。

\* 当時は変鯉と呼ばれていた

教養教育の現場から

第70回

## リベラル・アーツの風

東京大学が全学をあげて推進してきたリベラル・アーツ教育。その実践を担う現場では、いま、次々に新しい取組みが始まっています。この隔月連載のコラムでは、本学の構成員に知っておいてほしい教養教育の最前線の姿を、現場にいる推進者の皆さんへの取材でお届けします。

## 科学コミュニケーションのコミュニケーション？

／第4回「科学コミュニケーション・カフェ」

科学技術コミュニケーション部門

特任准教授

内田麻理香



## 同志社大学の同志とともに

——「科学コミュニケーション・カフェ」とはどんなイベントでしょうか。

「科学コミュニケーションに携わる人同士の交流が少ない」という問題意識が以前からあり、横のつながりを作ろうと始めたトークイベントです。4回目の今回は、同志社大学サイエンスコミュニケーション養成副専攻の4人の先生を駒場に招き、Zoomウェビナーで2時間のイベントを中継しました。野口範子先生は、以前当部門にいた石浦章一先生とともに副専攻プログラムを2016年に立ち上げた生物学者です。その野口先生がご家族の本棚にあった著書を見て招聘したのが、渡辺政隆先生。日本の科学コミュニケーションの先駆けて、私がこの世界を知るきっかけになった方でした。元村有希子先生は毎日新聞で活躍されてきた科学ジャーナリスト。榊太一先生は日本テレビアナウンサーを経て、現在は同志社のハリス理化学研究所で助教を務めています」

——今回のお題は「科学コミュニケーションのコミュニケーション」でしたね。「科学コミュニケーション元年」\*からはや20年ですが、「科学コミュニケーシ

ョン」という言葉すら普及していないのが現状です。大学院のガイダンスで聞くと、学生数十人のうち、知っている人は1~2人程度の年もあります。でも、たとえば悩み相談で科学に関わる質問に答えたら、それも実質的には科学コミュニケーションなんです。裏方で貢献する科学コミュニケーターは少なくありませんし、学校の理科の先生や博物館の学芸員なども科学コミュニケーターに入ります。言葉が普及しなくても活動が広がればいいのか、言葉も知られないとダメなのか。登壇者の議論は前者のほうに傾きましたが、参加者アンケートでは、科学コミュニケーターの専門性のアピールの場や、科学コミュニケーションの教育プログラムの卒業生が積むキャリアに及ぼす影響を考えると、「科学コミュニケーション」という言葉の普及がやはり重要だという声もありました。この世界で活動する一人としてあらためて考えさせられました」

## 共通の目標は掲げられるのか？

——ひと口に科学コミュニケーターといっても、中学校の先生からYouTuberまで様々な形があるわけですね。「職能も人それぞれです。書き手である

元村先生や渡辺先生は執筆力に秀で、アナウンサーである榊先生は短い言葉でキャッチーに語る力が抜群です。様々な職能を持つ科学コミュニケーターが共通の目標を掲げることができるのかも今回のテーマでした。野口先生は、普段から科学を利用しながら生きているという実感を広げることが科学コミュニケーションの仕事だと語りました。元村先生は、民主主義の運用には科学が前提であり、科学コミュニケーションは民主主義の基盤だと述べました。科学リテラシーを自分ごとと捉える人を増やすことの重要性や、知識を増やすより知識を運用する力や知識にアクセスする力をつけることの意義が確認される場となりました」

「たとえば、科学コミュニケーションに関係する複数の学会間にも、性格が近いのに交流は少ないという問題があります。学内でも科学コミュニケーションに関わる活動がいくつか並行して行われています。この「科学コミュニケーション・カフェ」などの機会を使い、学内の科学コミュニケーター同士のコミュニケーションも進められればと思います」

## 大学の科学コミュニケーション教育組織など

北海道大学	科学技術コミュニケーション教育研究部門 (CoSTEP) : 2005年~
大阪大学・京都大学	公共圏における科学技術・教育研究拠点 (STIPS) : 2012年~
東京大学	科学技術インタープリター養成プログラム : 2005年~
同志社大学	サイエンスコミュニケーター養成副専攻 : 2016年~
愛媛大学	理学部 科学コミュニケーションプログラム
お茶の水女子大学	サイエンス&エデュケーション研究所 : 2005年~
立教大学	理学部 共通教育推進室 (SCOLA) : 2004年~

\*科学技術振興調整費によって3大学で科学コミュニケーター養成プログラムが始まった2005年は「科学コミュニケーション元年」と呼ばれています。



① (右から) 駒場に集結した榊太一先生、元村有希子先生、野口範子先生、渡辺政隆先生、司会を務めた内田麻理香先生、そして裏方として参加の定松淳先生 (KOMEX)。②2時間のイベントはZoomで生配信され、同志社大学サイエンスコミュニケーション養成副専攻と東京大学科学技術インタープリター養成プログラムの学生・卒業生のほか、科学コミュニケーションに関わる社会人や研究者ら、計90人以上が参加しました。

## UTokyo 第36回 バリアフリー最前線!

障害がある職員のお仕事拝見①

本郷・環境整備チーム  
の巻



### 落ち葉回収から石庭作りまで

安田講堂周辺や三四郎池、赤門周りなど、本郷キャンパス共用部の清掃を主に担当している本郷・環境整備チーム。13人の障害のある職員と9人のコーディネーターから成るチームです。掃き掃除や草取り、ゴミの回収・分別、赤門の石庭作りなど、キャンパスの広い範囲を概ね1週間かけて回り環境を整えています。「3班に分かれて、屋外清掃を中心に行っています。雨の日は、袋とつかみを持ってゴミ回収をしています。合羽を着て作業をするのですが、暑い日は熱がこもってしまうので、制服が汗でびしょりになってしまい大変です」と小松春斗さん。合羽を着なくても暑い夏の屋外作業。冷却タオルを首に巻いたり、小まめに水分補給するなどの対策をしてきました。7月には小さなファンが付いた空調服が支給されることになり、暑さが軽減されることを期待していると言います。

秋から冬にかけては、イチヨウの落ち葉や実の清掃です。「秋は大量に葉が落ちてきます。それを掃いて回収しています」と北沢聡さん。2006年に入職したベテランです。北沢さんと同期の早川健太さんは、掃き残しがないように、最後にしっかり確認していると話します。正門から安田講堂に続く銀杏並木などの清掃は、シーズン中はほぼ毎日。重さがある銀杏は一時的に道の脇などに掃き込み、落ちてくる量が減ってきた頃に回収しているそうです。

他にもキャンパス内のゴミ箱に捨てられたゴミの回収や分別、三四郎池の排水溝や滝周りの清掃なども担当しています。観光客が増えたことの影響か、近年ゴミの量がかなり増えているとか。

自然豊かなキャンパスでは、思わぬ生き物に遭遇することも。「今日は赤門周辺で作業中に蛇が出ました」と小松さん。スズメバチやカメなども見掛けるそうです。

キャンパスを訪れる人が気持ちよく歩けるようにしたいと話すチームメンバー。青い制服で作業をしているスタッフに目を留めてみてください。



安田講堂前広場で清掃を行う環境整備チーム。朝のミーティングとストレッチで身体をほぐした後、作業を始めます。

## #WeChange Now

第14回 ジェンダー・エクイティ推進オフィス通信

### 生理用品を考えるトークイベント

6月30日、東京大学ジェンダー・エクイティ推進オフィスは、保健センター女性診療科と共催でSafer Campus at UTokyoの一環として、トークイベント「安心、快適に。キャンパスにおける生理用品へのアクセシビリティを考える ～ディスペンサー&情報カード・モノの「その先」へ～」を行いました（協力：NPO法人TGP、グローバル教育センター）。

当日は、NPO法人TGP代表の東尾理子氏、保健センター女性診療科担当医の中西恵美氏をゲストに迎え、当オフィスが行っているTGP提供の生理用品ディスペンサー設置事業や、東京大学保健センター女性診療科と連携した、リプロダクティブ・ヘルスや医療機関に関する情報をまとめたカードを紹介しました。さらに、性と生殖に関する健康と権利をとりまく環境や、ゲストが行っている取り組みについてパネルディスカッションを行いました。

その後、参加者と登壇者でグループディスカッションを行い、大学内での生理用品をはじめ性に関する情報やケア、サービスへのアクセシビリティの現状・課題、改善のために必要な施策、希望するアクションなどについて話し合いました。

イベントを終えて、参加者からは「はじめて知ることがたくさんあった」「もっと男性にも参加してほしい」「ぜひ必修の授業としてやってほしい」「性暴力やLGBTQ+に関する知識を学生・教職員双方に普及することは急務だと思う」といった声がありました。

当オフィスでは、生理用品アクセス改善をはじめ、ジェンダー平等実現に向けた取り組みを引き続き進めてまいります。

(特任研究員 福田和子)



左から中西恵美氏、東尾理子氏、福田

<https://wechange.adm.u-tokyo.ac.jp/>

## ワタシのオシゴト 第230回

RELAY COLUMN

教養学部等学生支援課 近藤里帆  
学生支援チーム

## 駒場Iキャンパスの“祭”の裏方



「ふんばるず」のぬいぐるみとともに精進して参ります

私の目玉業務は、11月に開催される駒場祭のサポートです。運営主体である駒場祭委員会（学生自治団体）より様々な要望を受け、関係部署や先生方と調整しています。祭を盛り上げたい委員会側と、祭を安全に完遂してほしい事務側との間には心の距離を感じることもあります。学部1・2年生ながら広報や企画運営、原状回復に至るまでを監督する委員会の姿勢には尊敬の念を抱きます。何より、彼らが無事に3日間のお祭りを終了できたときにはホッとします。

当チームは日々、学生達の日常的なトラブルから学生自治会との学部交渉に至るまで様々な相談事があり、程よいお祭り状態です。明文化されていないことも多いため調整が難しく感じることもありますが、心強い先輩方や懐の深い上席者に支えられて、のびのびと過ごさせていただいています。

今年の駒場祭は11月22日（土）～24（月祝）に開催されます。是非遊びに来てください。

最近飲んだク  
ブラス味の木  
耳汁

得意ワザ：バランスボールの上で素麺が食べられます  
自分の性格：割とずっとご飯のことを考えています  
次回執筆者のご指名：永岩修也さん  
次回執筆者との関係：同期の東京スイーツ巡り仲間  
次回執筆者の紹介：業務改革のエースです

専門知と地域をつなぐ架け橋に

FSレポート!

第38回

工学系研究科修士課程1年

鬼塚大輝

文科一類2年

堀田悠生

情報理工学系研究科修士課程2年

戸井啓允

## 棚倉の魅力をも未来の観光へ



山本不動尊での集合写真

私たちは昨年度、福島県棚倉町で観光スポットの洗い出しと観光ルートの構築に取り組みました。棚倉町は棚倉城の城下町として知られ、歴史的建造物や

アウトドアなど多様な観光資源がありますが、知名度の低さが課題でした。そこで、初めて訪れる学生の視点で新たな魅力を発掘し、観光客誘致を目指しました。

第1回の現地活動では、事前に調べた観光地を実際に周り、現状の調査を行いました。それを基に、課題の特定やターゲット層の選択を行い、提案の原案を作成しました。第2回の現地活動では、観光に携わる方との意見交換を行い、提案をブラッシュアップしました。第3回の現地活動にて、現地で報告会を行いました。

1年間の活動を通じて、大きく3つの提案を行いました。1つ目は「日帰りサイクリングコース」です。徒歩での移動に限界を感じたことからレンタサイクルを活用し、棚倉町の特徴である「一宮が2社存在する」という特徴を活かし、城跡や神社仏閣を巡る歴史好き向けのルートを設計しました。2つ目は「一泊二日コース」で、車で訪れる観光客を対象に、1日目は町の北側をサイクリングで、2日目は南側をドライブで巡る広域観光プランを提案しました。3つ目は「情報発信の改善」です。桜や紅葉といった季節情報の発信方法の見直しに加え、観光ルートマップやグルメマップの作成、観光案内所の設置など、情報の集約と発信力の強化を図る提案をしました。

なかでも「日帰りサイクリングコース」は特に高く評価され、現在はテスト導入が進められて



作成した棚倉町サイクルマップ

います。

今回のフィールドワークを通して、実際に現地を訪れたからこそ、棚倉町の魅力や、外からは見えにくい課題に気づくことができました。また、地域の方々や関係者の皆様から直接伺ったお話は、観光ルートの設計や施策提案に大いに役立ちました。今回得た経験を、今後の活動にも活かしていきたいと考えています。最後に、温かく迎えてくださった自治体の皆様、ご支援いただいた東大FSの皆様に、心より感謝申し上げます。

●メンバーはほかに多賀谷勇佑（工4年）、前田晃輔（農学生命科学研究科修士1年）

# インタープリターズ・第215回 バイブル

総合文化研究科 准教授 豊田太郎  
科学技術コミュニケーション部門

## Mirror Bacteriaの衝撃

先日、「日本人だけが読めないフォント」というインターネット記事を読み、そのフォントを公開しているウェブサイトを知った<sup>※1</sup>。私も「よく作り込まれているなあ」と感心しつつ、このフォントで書かれた文を読もうとすると、その見た目に思考が邪魔されてもどかしさを感じ、読むのにとっても時間がかかった。もしこのフォントで書かれた論文が氾濫したらと想像してゾッとした。この経験は、近い将来実現すると科学者が予想する“人工微生物”「Mirror Bacteria」が、人類を含む地球上の生物に与えるであろう衝撃を思わせるものかもしれない。

生物は分子でできている。分子は多数の原子が連なったかたまりである。生物の体をつくる分子と、構成原子やその結合は同じで、全体形状だけが鏡で映した関係にある特殊な分子も（多くはないが）存在する。近年、そうした特殊な分子が少量でも生物に与える影響が明らかになってきている。全体形状が鏡映しの関係にある2つの分子において生体内での量や役割に差異がみられる現象はホモキラリティとよばれ、生命起源の謎の一つとされている。そこで科学者チームが最近、この特殊な分子のみでできた体をもつ人工微生物「Mirror Bacteria」が人の手でつくられたら、生物にどのような影響を与えるかについて議論をまとめ発表した<sup>※2</sup>。

この発表によれば、Mirror Bacteriaは、地球上の生物と同じ餌を摂取して増殖することが可能である。もし生物がMirror Bacteriaに感染すると、生物はそれを排除する仕組みをもっておらず、仮に免疫系が新たに学習できるにしても膨大な時間がかかり、それまでにこの人工微生物が生体内で増殖する結果、生物体内の様々な機能が不全となることが想定される。つまり、ホモキラリティで支えられてきた地球上の生物全体の営みがMirror Bacteriaによって脅かされることになる——発表した科学者チームはこう警鐘を鳴らした。実は、生物のDNAと鏡映しの関係にあるシュピーゲルマーという人工の分子はすでに開発されており、新しい薬剤の候補として注目されている。現在、Mirror Bacteriaに関連する実験への対応をめぐる、世界で議論が始められている。まさに「責任のある研究・イノベーション（RRI）」が求められる課題の一つとなるだろう。

※1 <https://fontmeme.com/jfont/electroharmonic-font/>

※2 K. P. Adamala et al., Science 386, 1351-1353 (2024).

科学技術インタープリター養成プログラム

# HCD編 ききんの き

寄付でつくる東大の未来

第69回

ディベロップメントオフィス  
アソシエイトディレクター

二瓶仁志

## ホームカミングデイWEB公開！

10月18日に開催される“オール東大の祭典”ホームカミングデイ。今年は「おかえり、つながり、銀杏祭」をスローガンに掲げ、推定20万人いるといわれる活躍中の卒業生や、地域のお店・住民、そして広く東京大学に関心のある方々を本郷キャンパスにお招きします。

ホームカミングデイ開催を広く世の中にお伝えする第一弾として、WEBサイトのトップページを公開しました。10月18日開催の予定を掲げるほか、企画募集の呼びかけを行います。

そして、ホームカミングデイで目玉の企画となる「周年懇親会」の申し込みを開始します。今年は昨年より倍増となる、卒業5・10・15・20・25・30・35・40・45・50・55・60周年の「12学年」もの卒業生向けに懇親会を開催します。『学内広報』をお読みの方々のなかにも、周年を迎える東大卒業生は多いはず。懐かしの同期に声をかけ、思い出話を花を咲かせるちょうどいいきっかけとして、ぜひこの「周年懇親会」にご参加ください。

また、卒業生でなくとも、ぜひ「企画出展」をしてください。ホームカミングデイは昨年の来場者が約8,000人。学内のみならず、普段の活動を世の中に広め、共感と支援を得るための貴重な機会となるはず。

昨年は物産マルシェ（農学部）、講演会（地震研究所）、「家族で体験 理学のワンダーランド」（理学部）、VR体験（ニューロインテリジェンス国際研究機構）など学内から積極的な出展があり、大人から子どもまでの来場者が東大ならではの体験ができたこと非常に好評でした。

さらに、もっと小さな単位の同窓会やサークルでの出展も大歓迎です。東大蔵元会の利き酒の会や、東大三四郎会のタルトづくり体験にはたくさんの方が集まりました。焼きそば屋やクレープ屋などを親しい方々と切り盛りし、思い出に残る1日を作ってください。

東京大学と社会がつながる場として「おかえり、つながり、銀杏祭」を盛り上げたいと考えています。ぜひご参加ください！



ホームカミングデイ  
WEBサイトはこちら



**トピックス** 全学ホームページの「UTokyo FOCUS」(Features, Articles)に掲載された情報の一覧と、そのいくつかをCLOSE UPとして紹介します。

掲載日	担当部署・部局	タイトル (一部省略している場合があります)
6月12日	本部経理課	第4・5・6回東京大学債券の発行条件を決定
6月13日	情報理工学系研究科、工学系研究科・工学部	「NHK学生ロボコン2025」で東京大学RoboTechが優勝！
6月13日	広報室	データ・メディア・テクノロジーで読み解くガザ危機の深層
6月17日	広報室	資源安全保障の危機に晒されている＝岡部徹   史料を次代に残すのが困難になりつつある＝水上たかね   教育格差が広がりがつつある＝勝野正章   昔よく見た生き物を見なくなった＝森章／広報誌「淡青」50号「日本の課題に立ち向かう東大人たち」
6月18日	農学生命科学研究科・農学部	高山誠司名誉教授が、公益財団法人藤原科学財団より第66回藤原賞を受賞
6月25日	広報室、新領域創成科学研究科	鈴木綾教授が国連大学上級副学長に10月就任
6月25日	本部人事企画課	令和7年度名誉教授の称号授与
6月26日	本部学生支援課	東京大学洋弓部の嶽間澤選手が全日本選手権で3位入賞！
6月27日	本部コミュニケーション戦略課	NHK WORLD-JAPAN「tiny desk concerts JAPAN in schools」放送決定！ちゃんみな「降臨」
6月30日	本部経営戦略課	本学総長が国立大学協会会長に選出
7月1日	本部コミュニケーション戦略課	社会連携講座等検証・改革委員会の設置について
7月2日	史料編纂所	JDCat (人文学・社会科学データカタログ) へのデータ追加公開
7月3日	総合文化研究科・教養学部	言語情報科学専攻の石原あえか教授がゴールデン・ゲート・メダルを受賞
7月3日	本部入試課	令和8年度大学入学共通テストに係る「イヤホン不適合措置」申請について
7月4日	教育学研究科・教育学部	「個人研究型探究学習」を指導する高校教員向けの研修プロジェクトを始動
7月4日	本部コミュニケーション戦略課	NHKEテレ放送のお知らせ「シンポジウム 生成AIが教育を変える」
7月7日	社会科学研究所	社会科学研究所SSJDAが国際認証CoreTrustSealを取得
7月9日	本部協創課	日立東大ラボがインベリアルカレッジロンドンと共同作成したWPを公開

## CLOSE UP 藤井総長が国立大学協会の会長に就任

(本部経営戦略課)



6年にわたって会長を務めた永田筑波大学長(左)と握手する藤井総長

6月25日に開催された国立大学協会(国大協)の2025年度第1回通常総会において、役員改選が行われ、本学の藤井輝夫総長が会長に就任しました。東大から国大協会長に選出されるのは、2009年～2013年に会長を務めた濱田純一総長以来となります。

国大協は、81国立大学法人を正会員、8国立大学を副会員、4大学共同利用機関法人を特別会員とする一般社団法人です。国立大学法人が実施する教育・研究及び社会貢献に関する多種・多様な活動において、質の高い成果を挙げるための環境作りを行い、国立大学

法人の振興と高等教育・学術研究の水準の向上及び均衡ある発展に寄与することを目的としています。

総会後の記者会見で藤井総長は、アカデミアを取り巻く環境は国内外で厳しいものの、日本が作り上げてきた知の拠点である国立大学全体として社会や国民のために尽力していきたいとの旨の決意を語りました。藤井総長の国大協会長任期は2027年6月まで。副会長には、寶金清博(北海道大学)、越智光夫(広島大学)、梅原出(横浜国立大学)、喜納育江(琉球大学)の各学長が選ばれています。

## 表紙について

記念式典は水槽用の空洞の隣に掘られた純水装置室用の空間で行われました

今号の表紙は6月28-29日に掘削完了記念見学会が行われたハイパーカミオカンデの超巨大空洞です。

ハイパーカミオカンデは、素粒子の統一理論や宇宙の進化史の解明を目指し、岐阜県飛騨市神岡町の山の地下600mに建設中の巨大検出器。2021年にトンネル掘削工事を開始し、直径69m高さ94mに及ぶ超巨大地下空洞の掘削がまもなく完了します。今回の見学会はそれを記念するとともに、スーパーカミオカンデを遥かに凌ぐ巨大プロジェクトの概要を

幅広く知ってもらうために行われたもの。600人の参加枠に1万3000人以上が応募するという大人気のイベントとなりました。前日には報道陣向けの見学会と記念式典が現地で行われ、多くのVIPが参加。本学からは藤井輝夫総長も登壇し、関係者の皆様への感謝と計画への期待を述べました。

本誌次号では、神岡町公民館で行われた講演会「ハイパーカミオカンデと大規模地下空洞掘削工事」を中心に、プロジェクトの現況を紹介します。





## CLOSE UP 鈴木綾教授が国連大学上級副学長に

(広報室、新領域創成科学研究科)



鈴木先生の研究は『淡青』49号の特集「知の冒険者たち」でも読めます

新領域創成科学研究科の鈴木綾教授が国連大学（UNU）の次期上級副学長に任命されたことが、6月23日に国連から発表されました。農学生命科学研究科の白波瀬佐和子特任教授の後任として10月1日に就任する予定で、国連事務次官補も兼務します。上級副学長に就任後は、国連大学全体のマネジメントサポートや国連の学術機関としての統合的で一貫した活動を進め、日本の学术界や政府機関との関係促進などに取り組む予定です。

鈴木先生の専門は開発経済学。発展途上国の貧困削減に関する幅広い研究に取り組み、雇用機会や産業発展などを調査してきました。

主な研究テーマの一つが高付加価値農業で、ガーナ、エチオピア、ベトナム、インドネシアなどで現地調査を行ってきました。

鈴木先生は2008年に米国カリフォルニア大学デービス校で農業資源経済学の博士号を取得。開発経済学会の創設メンバーで理事、またアジア開発銀行が発行する『Asian Development Review』の編集委員も務めています。新領域創成科学研究科の講師を経て、2015年に准教授に就任。2020年に教授に昇任しました。

UNU上級副学長の任期は2027年9月30日までの予定です。



## CLOSE UP RoboTechがNHKロボコンで優勝

(情報理工学系研究科、工学系研究科・工学部)



笑顔がこぼれるRoboTechの皆さん。次の舞台は8月24日@モンゴルです！

6月8日、「NHKロボコン2025」が大田区総合体育館で開催され、学生サークル「東京大学RoboTech」（顧問：情報理工学系研究科 國吉康夫教授）が優勝しました。

今大会の競技課題は「ロボットバスケットボール」で、各チームはオフェンスとディフェンスを交代しながら、創意工夫と技術を駆使して製作した2台のロボットで得点を競いました。天を震わすような力強いシュートが得意な「震天」と地を動かすような高いジャンプが得意な「動地」の2機体で今大会に臨

んだRoboTechチーム。決勝戦では、昨年まで3連覇中だった豊橋技術科学大学を7対3で見事に打ち破りました。RoboTechのNHK学生ロボコンでの優勝は今回で5年ぶり8度目（オンライン大会を含む）となり、8月にモンゴルで実施される「ABUアジア・太平洋ロボコン」に代表として出場します。



## CLOSE UP 洋弓部の嶽間澤選手が全日本選手権で3位入賞

(本部学生支援課)



上／試合中の嶽間澤選手  
左／栄誉のメダルとともに

5月16日～18日、滋賀県米原市のグランスノー奥伊吹特設会場にて第54回全日本フィールドアーチェリー選手権大会が開催され、本学洋弓部の嶽間澤拓輝選手（法学部・4年）がリカーブ男子部門で見事3位入賞を果たしました。3位以内でメダルを獲得するのは、洋弓部として初の快挙です。

アーチェリーは、弓で数十m離れた的の中心を狙って矢で射抜き得点を競うスポーツです。フィールドアーチェリーでは、山や森の中にある様々な距離・角度的に射抜きます。斜面や不安定な足場といった自然環境に対応

しながら、技術だけでなく集中力や判断力も問われる競技です。今回、嶽間澤選手が入賞したリカーブは、五輪種目に採用されている伝統的なスタイルの一つで、リカーブボウという反り返った形状の弓を使う種目です。

【嶽間澤選手コメント】「自身初の全日本大会出場、その中で3位という結果を残すことができとても嬉しく思います。ただ、準決勝は1点差で敗北するなど悔しい点もあったので、今大会で得た経験や課題を次に活かし、次のインカレではさらに良い結果を残せるよう、努力を重ねていきます」

## UTokyo 「安田講堂」Tシャツ新登場!

竣工から100年を記念して「安田講堂」をモデルにしたTシャツが登場！ 前面に堂々たる安田講堂のデザイン、背面の首元にはさりげないアクセント。カラーは定番の白・紺の2色展開。シンプルなのに存在感抜群で、学内行事にも普段使いにもぴったりです。ぜひ店頭で質感やサイズ感などをお確かめください。(田)



竣工100年記念!

安田講堂  
Tシャツ  
白・紺  
M・L・XL  
4,000円(税込)

UTCCからのお知らせ



→オンラインストア



## 戦時下の卒業論文

私の所属する人文社会系研究科・文学部国文学研究室は、明治10年（1877）の東京大学創立時にその歴史をさかのぼることができる。この時、設置された法・理・医・文の四学部のうち、文学部は「史学、哲学及政治学科」と「和漢文学科」の2学科から編成されていたが、その「和漢文学科」が現在の国文学研究室の起源である。

歴史を有すということはその時間を蓄えた文物を持つということでもある。研究室には、明治39年（1906）から昭和57年（1982）までの卒業論文が保管されており、卒業生本人・ご遺族等へ返却したものや記念館等に寄贈したものを除き、その数は285点に及ぶ。数年前、資料保存の専門家の助言を受け、一点一点ずつ状態を確認しながら、整理を行った。明治から大正・昭和初期のものは、芳賀矢一・藤村作・上田萬年など国語・国文学研究の泰斗である教員のコメントが付けされていたり、当時の現代文学（今の近代文学）をテーマとする卒論も数多くあったりと、歴史に触れる感動や驚きを味わいながらの作業であった。しかし、どのあたりからか、趣きが変わってきた。原稿用紙や製本がぼろぼろで、料紙が剥落しそうなものが現れ始めたのである。

記されている卒業年月は、昭和16年（1941）12月、同17・18・19年の9月。太平洋戦争下における昭和16年10月以降の修業年限短縮と繰り上げ卒業、学徒出陣の世代の卒論だ。執筆に用いられた原稿用紙の紙質が低いのも、製本等が満足に行えないのも、やむを得ない

時代であった。慎重にページを繰っていくと、この頃の卒論には「あとがき」や「附記」があることに気付く。卒論が未完であること、慚愧の念に堪えないこと、学問・研究を打ち切らざるを得なかった先輩たちの思いが、言葉や行間に滲む。そのうちの一つ、昭和17年8月10日に摺筆、受領された卒論の「附記」を、部分的ではあるが紹介したい。

傳記、著作、作品全般に亘って研究するのが本来の目的であつたのですが、時間不足の為に、その著作全般にも検討を及ぼすことが出来ず、甚だ残念に思つてゐる次第であります。後日改めて、この小論の企図した、完璧なる「世阿弥元清論」をものしたいと存じます。

賢しかな言葉は必要あるまい。暴力的な力が社会を覆う時、個人から何が奪われるのか。それでも、人が何を思い、何をなそうとするのか。これらの卒論は一つの象徴だろう。彼らが手を伸ばしてつかみたいと願ったもの、学問・研究とそれを実現する環境を守り、次の世代へ伝えること。卒論を薄様でくるみながら、大学人として姿勢を正さねばと感じたことを思い出す。時間を宿した文物は、静かに確かに、大切なことを教えてくれている。

木下華子  
(人文社会系研究科)

